アジア史の授業
東洋史学

東洋史学研究室には、中国史・東南アジア史など、アジア史の研究をしている人が所属しています。その専門の授業ではどんなことをやっているのか、皆さんに雰囲気を知っていただくために、二つの授業についてご紹介します。

まずは、東南アジア史を概説する講義。私が研究しているのは、東南アジア大陸部北部から中国雲南省南部にかけての、タイ族という民族が住む地域の歴史ですが、この授業ではもう少し枠を広げて東南アジア全体の歴史を扱います。気候や地理的特徴などから始めて、先史時代から順に解説していきます。季節風を使った海上交易など、東南アジア域内の交流、東南アジアと中国や南アジアとの交流にも目を向けます。扱う時代としては、せめて私が研究対象とする近世まで話ができるといいのですが、古い時代に力を入れすぎているのか、15 回の授業ではどうやっても 16 世紀前半までしか話せないのが残念なところです。

二つめは『硃批諭旨』という史料を読む演習。実はこれは私がしている授業ではなく、別の先生の授業です。学生さんに交じって、オブザーバーとして、この授業をきかせていただいているのです。『硃批諭旨』は、地方の大官が清の雍正帝に対して送った親展状（奏摺）を集めた書物なのですが、奏摺に書き込まれた皇帝の意見・指示（硃批）も読むことができます。いろいろな具体的な事例が出てきて、とても面白いです。奏摺には普通の漢文にはない特殊な言葉遣いも多く、一人で勉強していても読めるようにならないと思ったため、私も授業を聴講させてもらっています。

その他にも東洋史学では、中国民族史、中国近代史、南アジア史に関する授業など、様々な授業が開講されています。一度、名古屋大学文学部シラバスの WEB サイトをのぞいてみてください。もちろん他の分野・専門の授業も載っています。何か、皆さんの興味を引くものが見つけられるかもしれません。

加藤久美子　教授

雲南省西双版納の仏教寺院にて

映像からみえるもの
映像学

皆さんは、映像といえば何が思い浮かぶでしょうか？映画館や自宅のテレビ放送・ネット配信で観た、好きな俳優やアイドルが出ている作品でしょうか。もしくは、友人知人と共通の話題を得るために、お薦めサイトで読んだレビューやファスト動画で得た情報でしょうか。人によっては作品よりも、一緒に観た相手や SNS でリアルタイムに感想や共通キーワードを投稿したことなど、その時の経験の方が思い出深い場合もあるかもしれません。このように、一口に映像と言っても思い浮かべるものは人それぞれだといえます。

さらに言えば、私の所属する映像学は、映画の研究が中心でありつつも、MV やテレビ番組、配信動画、ビデオゲームなど、ありとあらゆる映像が対象となっています。私たちは、映像に映っているモチーフや演出などを分析し研究するだけではありません。それが、どのような時代と場所で、社会的あるいは技術的な文脈のもとに作られて、配給・配信されているのかについても調べて検証しています。あるいは、その映像がどのような装置や状況で視聴されているのかについて、その意味や意義を考察することもあります。

そうしたことは、私たちが社会の中で映像文化に関わって、どのようにものごとを感じて考え振舞っているのか知る手がかりとなり得ます。私自身は、日本国内で 1960 年代後半に発足して以来今日まで続いているアニメーションサークルについて、その観賞・自主制作・自主上映会の活動や、文化産業・芸術・教育とのかかわりを調査研究しています。アニメーションサークルは、オタクと呼ばれるアニメファンと似ている側面もありますが、それとは違う独自の文化を発展させてきました。このように、映像と一口に言っても様々な切り口があるため、自分なりに研究できるのが映像学の醍醐味だといえます。

林緑子　博士後期課程 3 年

真っ白なスクリーンには何が映っているのでしょうか

「モノ」から歴史を捉える
考古学

考古学の研究対象と聞いてどんな時代・地域をイメージしますか？高校の教科書で最初に登場する日本の旧石器・縄文時代や古代エジプト文明などの先史時代（文字が登場する前の時代）を想像する人も多いかもしれません。しかし、実際の研究対象は「人類が生活した時代」、つまり先史時代に加えて、歴史時代の研究も広く行われています。

歴史時代を対象にした研究では、「文字」から歴史を解き明かす文献史学と「モノ」から歴史を捉える考古学の相互関係が重要で、過去の人間活動を正確に復元するためには文献史学と考古学両者のアプローチが求められます。

学部 3 年生から専攻生問わず受講できる「文化資源学演習」の授業では、ある遺跡（22 年度：三遠国境の中世寺院、23 年度：西濃の古代遺跡）について、文献史学と考古学の両分野に関する生徒の発表と質疑応答を通して学習し、学期末にその遺跡を実際に訪問して知見を深めます。今年は昨年度から考古学研究室が調査・研究を実施している、岐阜県西濃地域、特に奈良～平安時代に畿内と東国を隔てた関所であった不破関について学習しました。この授業では、考古学の専攻生であっても文献史学の発表を選択することもできるため、歴史時代の研究に必要な姿勢・アプローチについて正しく理解する良い機会になり、とても魅力的な授業だと思います！

今年度より、考古学研究室では不破関の発掘調査を実施します。歴史や発掘に興味のある方はぜひ、研究室の各種 SNS（Facebook、Instagram、X(旧 Twitter)）をチェックしてみてください。もちろん、この通信を読んでいる皆さんが発掘に参加してくれる日を楽しみにしています！

小出一磨　学士課程 4 年

西濃地域でのフィールドワーク

月刊
名大文学部
第 135 号
隔月刊行

編集発行：
名古屋大学文学部広報体制委員会
koho@hum.nagoya-u.ac.jp
寄稿者の所属と学年は寄稿時点のものです。
2023 年 9 月 10 日発行